

平成 30 年 10 月 12 日発行

旧村川別荘市民ガイド事務局

我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課

歴史文化財担当：木村、田中、手嶋、今野

〒270-1166

我孫子市我孫子 1684 番地

TEL:04-7185-1583 (直通)

E-mail:abk\_bunka@city.abiko.chiba.jp

# 旧村川別荘だより

139



## 月例会が開催されました。

10月の月例会が行われました。10月及び11月のシフトの調整と、竹灯籠の夕べの当日の分担について確認しました。

いよいよ、竹灯籠です！今年は、金曜日がSPレコード鑑賞会、土曜日がコカリナの演奏をお願いしています。ご都合がよければ、お越しください。

## 井上家の歴史（前半）

今回は、前回までの布佐の歴史、洪水の歴史を踏まえて、井上家の歴史をテーマに手賀沼干拓と、井上家がどのように布佐へやってきたのかをお話しました。

### 1. 手賀沼干拓

#### ○新田開発の種類

代官見立新田…幕府・諸藩によって進められる新田。「土豪、町人、百姓などが開発を出願して、代官が調査し、許可する」ものと、「代官自らが所管内の開発可能地を見立てて開発を主導して開いた新田」とに二つに分けられますが、代官見立新田といった場合、後者を指すことが多いです。

町人請負新田…町人の生活が裕福になる元禄以降に行われた新田開発。資金のある町人たちが耕地の開発を出願し、自らの資金で開発を行います。開発後はその土地の地主となり、入作（いりさく）百姓（その土地に住んで耕作する人）や出作（でさく）百姓（他所から来て耕作する人）たちを小作人としました。

村請新田…村役人（名主、組頭、五人組）以下村民の総意という形で開発を立案し、出願して拓かれた新田。

以上のような新田開発がありました。井上家の新田開発は「町人請負新田」に当たります。

### ○町人参入の手賀沼干拓

寛文 11（1671）年江戸の商人、海野屋作兵衛ら 17 人の商人を請け負い方として手賀沼開発許可が下りました。…**商人による第一次手賀沼干拓**

→海野屋作兵衛は発作新田に現在まで居住していますが、それ以外の人物は干拓が困難を極めたため、江戸へと引き上げました。

貞享 4（1687）年に町人請負新田は原則として禁止されます。

→新田開発で耕作地が広がったため、労働力不足による本田の荒廃、無理な干拓事業による構造被害の増加などが考えられます。

享保 12（1727）年、井上佐次兵衛が新田開発に乗り出します。…**商人による第二次手賀沼干拓**

○手賀沼干拓について（『旧村川別荘別荘だより』138号も一緒にご覧ください）

坎樋で手賀沼の水を排水し、干間堤で手賀沼を分けることで水を止め干拓を進めようとした。

坎樋（いりひ）…木製の水門。この水門を手賀沼と利根川の間に設置して、手賀沼の水を利根川へと排水しました。利根川が増水し、手賀沼の水位より上回った場合は、水門を閉じて、手賀沼中の水の量を調整しました。ただし、利根川と手賀沼の水面の差が小さかったことで、排水もなかなか進みませんでした。

干間堤（せんげんつつみ）…手賀沼を我孫子地区の上沼（かみぬま）と布佐地区の下沼（しもぬま）に分ける堤防。上沼と下沼を分けることで、下沼の干拓を進めようとしたが、洪水により堤は決壊し、以降造られることはありませんでした。

## 2. 井上家の歴史

今までの井上家の歴史は、『我孫子市史研究』第9号に掲載されている井上薫さんからの聞き取り「尋ねられるままに」—故郷と八十年を回顧する—によるところが大きかったです。なお、井上薫さんは、井上家第12代当主二郎さんの次男で1906年に生まれました。昭和時代の銀行家で、第一勧業銀行（現みずほ銀行）の初代会長になった人物です。

→この聞き取りからいくつかの疑問が出てきました。

### ○相島の由来

薫さんからの聞き取りでは「相島の名前の由来は井上家が名付けた」と、書かれています。

相…下総国相馬郡（新田開発をしている場所）

島…武蔵野国豊島郡（井上家が住んでいた江戸）

→まず、いままでの手賀沼の干拓の流れを整理しますと、井上家は第二次手賀沼干拓期に参入しており、参入当初は、もともとの干拓地を譲り受けるかたちでした。

そこで、井上家文書を見てみると、井上佐次兵衛が相島新田名主になったのは、享保19(1734)年10月前後とわかります。また、その3か月前の享保19年7月に作られた文書には、「相島新田名主久左衛門」と書かれています。このことから、佐次兵衛は久左衛門から土地を譲り受けており、譲り受ける前から佐次兵衛が土地の名前を名付けられる可能性は低いと考えられます。

現在のところ、それに代わる由来についてはわかりませんが、久左衛門の屋号が「相模屋」ですので、何か関係するのかもしれませんが。

### ○江戸の井上家について

井上家資料を見ていくと、一番古い資料は江戸時代のもので、井上家が江戸に住んでいたことがわかります。実際に薫さんの聞き取りを見ると「銀座六丁目付近（尾張町）で乾物屋を営んでいた。屋号は近江屋である。間口五間で奥行が二十間であった。尾張町で名主をしていた」と語っています。

→そこで、国立国会図書館に所蔵されている沽券帳を見てみると、「尾張町二丁目（中略）表田舎

間五間、裏行街並式拾間」とあり、薫さんのお話しと一致します。そして、この家屋敷は延享2（1745）年に佐次兵衛の名で売られているのからわかることから、享保には布佐に地所を求めたものの、延享までの20年間弱は江戸との縁もあったことがわかります。

また、井上家の資料を見ると名主と書かれた資料はありませんが、「家守（やもり）」と書かれた資料があり、江戸では家守を行っていたことがわかります。家守とは江戸時代、地主・家主に代わってその土地・家屋を管理し、地代・店賃（たなちん）を取り立て、また、自身番所に詰めて公用・町用を勤めた人です。

以上のように井上家は町人主体の手賀沼干拓に参加し、江戸から布佐へと定住していったことがわかります。今後は、井上家が布佐でどのように展開していったのかをみていきたいと思います。

## お知らせ

○内覧会を行います。

以前、お手紙を差し上げましたとおり、11月2日（金曜日）に白樺文学館と杉村楚人冠記念館で内覧会を行います。詳細はお手紙をご覧ください。

○研修会を行います

12月20日（木曜日）に研修会を行います。今年は埼玉県比企郡川島町に行きます。訪問する場所は広徳寺の茅野葺き替え、遠山記念館です。

遠山邸は、日興證券の創立者、遠山元一（1890-1972）が、幼い頃に没落した生家を再興し、苦勞した母、美以の住まいになるようにと、昭和8年から2年7ヶ月の歳月を費やして完成させて大邸宅です。

当日のスケジュールは未定です。決まり次第、ご連絡いたします。次回の月例会の時に出席を伺う予定ですので、ふるってご参加ください！

## 次回の月例会は・・・

**平成30年11月1日（木）午前9時半から**旧村川別荘新館にて月例会を行います。紅葉が綺麗な時期になっているでしょうか。今年の葉っぱの色づきを考えると楽しみになりますね。